

嬉泉の新聞

- ・嬉泉の新聞／第40号／1999年（平成11年）1月発行（年4回発行）
- ・発行所＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区粕谷2-13-24（〒197-0063） TEL 03-5374-6821
ホームページアドレス <http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/>
メールアドレス kisen@mxg.meshnet.or.jp
- ・発行人＝石井哲夫 ・編集人＝五十嵐猛

「介護保険制度への移行を前にして」

日本社会事業大学 中 島 健 一

いよいよ平成12年4月から介護保険制度がスタートします。要介護度認定は平成11年秋から始まりますので、実質的には1年を切ったわけです。

新制度に対する自治体や事業者の不安・混乱は大きいようで、担当者が自殺したなどというニュースも飛び込んできます。混乱ということでは、新設された介護支援専門員（ケアマネジャー）資格があります。これは、各団体の利害調整のために幅広い職種に受験資格が与えられました。「今度受験するんで、出そうな問題を教えてくれ」、友人の薬剤師からの電話です。

「えーっ！ おまえ受験するの？」

「うん。上から、これからは薬局がマネジメントする時代だから、おまえ資格を取れと言われたんだよ」

「それで、たとえばデイサービスってどんなサービスか知ってる？」

「デイサービス？ 何それ？ それが出るの？」

「…」今年は第1回目の試験だからテキストをしっかりと読んで、基本的なことを押さえてがんばれよと、電話を切りましたが、うーん、ケア現場を知らない（実感のない）ケアマネジャーに仕切られるようになってはおしまいだなと感じました。

「サービスの利用者という言い方はやめて、これからは、消費者という言い方に変えてはいかがでしょうか。その方がはっきりする」、厚生省が本年度設置したサービスの質の検討委員会での、ある委員の発言です。介護保険

制度は、措置から契約への移行であり、自己責任を前面に押し出した制度と言えます。今のところは老人福祉・老人介護の分野に限定されていますが、障害児者・児童福祉の分野にもハネてくることが考えられます。権利性の向上、サービス利用者の選択の自由、サービス利用に対する心理的抵抗感の軽減、競争によるサービスの質的向上、いずれも介護保険制度のキャッチフレーズです。でも、これらは本当に、現行の税金ベースの制度では実現が不可能なことなのでしょうか？ そして、何よりも商品、消費者と割り切っちゃった時、福祉とは何だ？ 国という集団、自治体という集団の義務は何だ？ という思いが沸き上がってきます。

私は、介護保険制度の創設に力を尽くしてきました。どのような制度にも長所・短所があるもので、介護保険制度についても、その長所が最大限活かされたとき、今以上のよりよい福祉社会が実現すると信じています。また、慈善・博愛などはこれからの福祉業務においては、前面に押し出すべきではなく、プロフェッショナルとしての磨かれた援助技術をこそ、前面に押し出すべきだと思っています。しかしながら、こんな時代だからこそ、もう一度“福祉とは何か”について、よくよく考え直してみるべきではないかと思うのです。なし崩しで流れるのではなく、立ち止まって考える勇気が必要だと感じるのです。

正月の晴れた日は、孫と外で遊ぶで暮らすことが多かった。もうすぐ四歳になる孫娘の生活は、家の中では大人の都合で翻弄されがちである。私が過ごす外遊びが、この子の気分転換になれば等と思いつながら、受容的交流の境地を堪能する一時を持つことが出来た。

一メートルほど路上から高い空き地を上りたがるこの子を抱き上げて乗せる。降りるときも「おろして」の要請に無条件で応えておろしてあげる。二回目、同じようにそれをして欲しいという要請に、「一人で出来ることはやってみたら。」と言うと、「私怖い」といので、「怖いことはやらないうでいいよ」と言って、二回目以後のトライを始める。「手と足をどう使えば怖くないか」をやって見せて、後ろから手で背中や手を取りながら、自分で上ろうという気持ち求めながら、少しずつ誘導を始めてみる。よく見ていると孫の「怖がる気持ち」と「やってきたいという意欲」の葛藤がよく感じられてくる。時には私の援助の手をゆるめ、時には援助を強めるといふ調節を行いながら、「一人で上り降りできる喜びと誇り」を彼女のものにする事が出来た

状態を確認して、土手登りの課題を終えた。

翌日、一人で土手の上り下りを楽しんでる孫の姿を見て、思わず「よかったね」とつぶやいてしまった。

児童福祉援助観について

児童福祉援助には、基本的には思想があり、理念があり、価値観があることを痛感している。孫と

社会福祉援助論

(その三) 石井哲夫

つきあって、「血のつながり」というより、「おさなご」の持つひたむきな生き方に打たれる。「何故だろう」。長いこと子どもに関する仕事をしてきて、一時的な子どもへの可愛らしさを感じるようなものとは異なる、生物としての種の営みのような「いのちの連結」を感じるのである。年をとれば死ぬ日が来る。この動かしようのない生物の宿命をよく自覚できる人

間が、無為にその日を送っていくのをどうこう言うものではないが、生きていくうちに先々のことを託せるのは、若者や子どもしかない。「先々のことを託す」という気持ちこそ、自分の価値をこの世に残し伝えるということなのであろう。人は自分が消えても、まだ多くの人が順次生き続けていくことにながて、自分の存在を強く意識することが出来れば、自分の生命の限りにおいてやれることは、よく

言われるような、その名をものに残すか、文化に残すかであったが、それ以外に他人に自分を残すという選択があることを指摘しておきたいのである。
人が他人を援助するということは、人へ自分の思いを伝えることになるという、重要な意義を見落としていて人があると思うのである。純粹に他人のために尽くそうと、自分の喜びの追求として児童

福祉援助を行おうとも、所詮、人間同士の選択の営みであれば、お互いによい選択をしたという満足感が出来ればよいことなのである。それが、とにかく個人的な「出過ぎ」があつて、他人の不満足を招くことになるから困るのである。

児童福祉援助は他人の満足を指標にしながら、その実は援助者の伝えという、大いなる満足感が存在しているのである。そして、これは単に被援助者との関係のみで考えられることなく、被援助者を取り巻く関係者や、援助者を取り巻く関係者という、コミュニティに関わる価値観の問題として捉えられることなのである。

つまり児童福祉援助に関する援助者と被援助者の関係は、閉ざされた二人だけの空間の出来事ではなく、そこに関係する人たちのコミュニティの出来事として捉えるべきことなのである。そしてこれに大きな意義があるのは、一人の援助者が援助という行為を通して、永遠の生命を得ることが出来るといふことだからなのである。

私たちの

グループホーム

須藤福祉センター各事業所からの報告

グループホーム 「春のひかり」誕生

社会福祉法人嬉泉理事

奥村 幸子

地域生活に向けて準備をしていた袖ヶ浦ひかりの学園の四人の仲間が、平成十一年一月一日付けで学園を退園し、グループホームでの生活に移行した。晴れ晴れとした四人の顔を見ながら、今までのことを振り返り、今後のことを思い感無量である。この四人がそれぞれ自閉症という障害を負って生まれたがために、私などには思っても及ばない苦勞の連続の中で生きてきたことを、またこれからその苦勞が続くであろうことを知っている私たちとしては、グループホームで暮らすこと自体を、この頃世の中の人々が疑いもなく良いこ

ととして考えていることには同感しにくい。グループホームで暮らすことがその人の幸せ感につながるということが大事なことで、外から見るとその方が幸せである。当たり前のことであるというのは、ひどく僥倖な気がするものである。もちろん施設の方が良いと言っているのではない。でも、私がかつて関わった四歳の情緒障害の男の子に、「皆と一緒にいけない子がいるけどどうしてかなあ」と聞いた時、「皆と行くと淋しいからでしょ」と、事も無げに答えたその子のこととがどうしても忘れられないのである。と言うより、その子によって教えられたこと、……大人は

「子どもは友達といえることが幸せなのだ、だから何とか友達の中に入れてあげたい」と思い込んでいたが、友達の中にいることが、かえって淋しい子どももいるのだ……が忘れられないのである。友達といると淋しいから一人の方が良いと思っている子どもに、「じゃあ、良いよ、一人でいようね」と言っていて、済まず訳にはいかない。人間である以上、だれだって本当は友達と一緒に良いのだ。でも、友達といると淋しいと感じているままの子どもを友達の中に連れ込むことはむごいことである。私たちがしなければならぬ援助の本身は、まず友達と一緒にいたいという気持ち育てることだろう。今、袖ヶ浦ひかりの学園に、「僕はここで暮らしたい、ぜひここに入れて下さい」と言ってくる自閉症者がいる。会社で、社会で苦勞し、疎外感を感じ、心の安らぎだけを求めているのであろう。世の中のすべての人が積極的に自閉症者を排除しているとは思わない。この人達の発想や反応が余人の考え及ばないものであることや、自分から積極的に説明してくれないことなどから、どうしてもいかに分からない人が多いのだろう。「集団の中

の孤独」に耐えきれず、傷ついて逃げ込んでくる自閉症者を知るにつけ、この人達の生き難さを思わずにはいられない。

今回、グループホーム「春のひかり」で生活するようになった四人の仲間のうちの三人は、施設を離れてグループホームで生活することについて散々考えて、施設の中で一人暮らしを体験したりしながら決心した。後の一人は常々「こんなところには住みたくない。町の中に住みたい」と言い暮らしていたので心から喜んでいて。四人とも、実際にグループホームの生活が始まってみて、初めてぶつかる出来事に動揺したり、混乱したりすることが沢山出てくるだろう。「頑張り」というだけでなく、必要な時にきちんと支えるためには、法人も職員も四人の仲間と一緒に、もっともっと力をつけていかなければならない。耐えきれないような辛さや、孤独感を一人きりで味わってもらいたくない。今始まった生活は、何代にもわたる職員にきちんと引き継がなければならない。「幸せ」は全うできない。後に続く人達のためにも、関係者と力を合わせ、しっかりしたシステムを創りあげていきたい。

職員の思い

竹田 富義

私にとって嬉泉は「ふるさと」いや、「我が家」のような気がする。十数年前「のびろ学園」に出会い、石井哲夫という人物を知った。ミスターやミセスを介して、学園の実践を観、研究機関誌や書籍を集めては読み、石井哲夫の訳の分からなさに愕然としたものであった。

五年ほど経ち自分なりの考えが出てくると、当時の私には石井先生の考え方や、のびろ学園の実践を受け入れられず否定した。この頃は、就職活動、就労後の予後活動などで、公私ともに多忙をきたし、「俺がみた子はどんな重度の子でも、必ずどこかに行かせてやる」と意気込んでいた時期で、「そんな甘っちょろい考えでは駄目だ」と思い込んでいたのである。それから十年ほど経過していく中で、自分と関わってきた子は本当に幸せか、自分自身納得のできる生き方をしているのか、自問自答するようになった。その行き着

いた先が、これまで否定していた受容的交流療法であり、石井先生の考え方であった。このきっかけは、ある子から「先生の嬉しそうな顔が見たいから我慢できるんだ」と、苦しい胸の内を語ってくれ、「障害を持ちながらも頑張っている姿」に、励まされている自分に気付いたことからである。

私にとって石井先生は、自分の生きざま、人生観を導いてくれた方で、その嬉泉に今自分が居るというだけで満足している。

嬉泉でとても感心するところは、硬直化しやすい施設にあって、発展的に療育が進められていることと、体罰や不正などを正す自浄機能が正常に働くことである。私の知る限りではかなり上等な施設と思う。

私の所属する「ひかりの学園」では、今変わろうと「産みの苦しみ」を体験中である。人材豊富な所である。必ずや良き方向性を見出してくれると信じている。微力ながら、私にできることは最大限協力していきたい。

(ひかりの学園)

鈴木 雅士

嬉泉で働き出して六年になろうとしています。月日が経つのは早いもので、「光陰矢のごとし」などという名句を思い起こさせます。そして、この原稿を書きながら過去を振り返ってみると、アメリカでの学生時代、「自閉症は俺が治してやる!」と粋がっていた頃、

そのために精神科医になるんだと頑張っていた頃、自分の勉強不足から医者にはなれないと挫折した頃、色々と過去が蘇り懐かしく思えてきました。こんな自分が今、福祉という分野の中で自閉症と関わり続けていて、道は違っても目的は変わっていないことに、自分でもよく諦めずにやってきたと感心しています。

しかし、現在福祉の世界は大変革の真っ直中で、仕事のあり方について、考え方について、改めて問い正されている時に、私は嬉泉という組織に守られているという安堵感に浸っていられるほど気楽者ではありません。今後嬉泉が、この時代の流れに停滞し保守的になっていくのか、また革新的な存在として時代を引っ張っていくのか、

か、(今のところ、革新的な方向に進んでいるようだ)ということも気になるところです。

それとは違い、この時代の流れに便乗して、新しい福祉を始めてみたいという野心もあります。

そうかといって、今ある幸せな暮らしの中で、のほほんと生きていければいいやという気持ちもあります。

そんな曖昧で中途半端な気持ちの揺れ動きが、今の自分なのです。ただ将来を考えた時、嬉泉のような大きな施設を総合病院に例えるならば、私は地域の町医者のような福祉をやり続けていたいと思っています。でもそのためには、多くの人脈とネットワークを持ち、多くの知識を有し、素晴らしい技術を持った福祉援助者にならなければなりません。それには「しばらくここで勉強しなければならぬいなあ」と思う今日この頃です。

(赤塚福祉園)

谷田 さつき

私には父はいないが、尊敬すべき(尊敬すべきといっても、社会

的な地位や名誉など全くない、いわゆるオバタリアン的存在の人だ(母がいる。その母の影響か、いつかは子どもに関わる仕事につきたいと願い、巡りめぐって今の嬉泉にいる。就職して十年、二十人近くいた同期も、それぞれの事情でここを去っていったが、母として父として、また違う仕事をしていても、ここで学んだことをそれぞれに生かしていると信じている。

自分で言うのもおかしいが、私は口うるさい女だ。そしてそのことがはっきり分かったのも、この仕事についてからで、最初のころは『すこやかな学園』で子どもと遊んでいても、「だめよ」ということが多く、奥村園長から「だめ」という言葉は使わないことと、二階の窓から言われたことがある。「危ないからだめ」「いじめたらだめ」「喧嘩したらだめ」と、私の中の常識が、その「だめ」という言葉を頻繁に使わせた。どうしてその言葉を使ったらいけないのか分からないでいたが、そこで「子どもの行動のすべてに興味がある」ことを教えられた。喧嘩して殴るのは悪いけれど「どうして殴ったのか」を考えることで、

子どもの裏の気持ちが分かる。好まれない行動も、大人に気が付いてもらいたいサインだということを考える、全て納得でき、その時から私は『だめ』という言葉が使えなくなった。危ない事、やってほしくない事に對して、大人の見方で押さえつけても子どもは意味が分からないから、同じ事を繰り返しやすいが、「どうして危ないのか、どうしてそれをやって欲しくないのか」をきちんと説明することと分かる場合もある。子どもの真の気持ちを育て関わりを大事にしていくなかで、人間として生きていく上で、非常に大切なことだということを学び、それが私の子育ての基本になっている。

しかし私生活になると、どうしても自分の感情を抑えきれずに、感情だけで子どもを叱っていることもある。買ったばかりのカーベットにこぼれたコーヒーの染みをふきながら、「これは手伝おうとしてこぼしてしまったんだ」と分かるものの、一度吹き出た感情はすぐに醒めず、怒りながら心の中で謝る。ここに来なければ、私は小さなことでも頭ごなしに怒っていたのではないかと考えると、石井所長の「デリケートで凄く感性、

純粹できれいな気持ち、実に美しい感性を示し、全身で喜びを表現してくれる」、「抑えても叱っても決して懲りないで、天真爛漫な生き方をしている人たち」と語る、子どもたちとの出会いに多いに感謝している。

(めばえ学園)

五十嵐 猛

嬉泉の中でケア・マネジメント研究会というものが、職員からの賛否両論の中で昨年の十月から始まりました。その内容はというと、当初は「高齢者用のケア・マネジメントの手法を借りながら障害者用のケア・マネジメントシステムを作成しよう」という試みであったのですが、どうやら石井所長の思考回路は我々研究会のメンバーよりも遙か彼方へと進んでいってしまい、「どうせ作るのならば、嬉泉ならではのカラーを出した『利用者の心のケア』に照準を絞ったケア・マネジメントの手法を編みだそうではないか」と軌道修正を余儀なくされ、我々が束になってようやく追いついていっているような状況です。

これは、今まで不可能だと言われ続けてきた「受容的交流療法をマニュアル化する!？」という、とてつもなく大胆な試みでもありますが、せめて、利用者の内面を理解する手がかりとなる位のもものは、なんとか出来る見通しが立ってきました。

月に一度の打ち合わせの中では参加者の誰しもが「周りに遅れをとるまい」と、疑問点や正直な意見を活発に発言しながら共通理解を深めています。それは、もう熱っぽく発言される方が多いため、記録者はいつも頭を抱えさせられますが、反面「これが、みんなが主体的に参加している状況なのだ」ということを実感しています。

嬉泉に限ったことではないのでしようが、施設の中の問題点として恒例として出ている「職員間のコミュニケーションが不足していて、共通理解がもたない」と不満や悩みを抱えておられる方には、当研究会への参加、もしくは定期的な研究会を開くことをお勧めします。是非、試みて下さい。

それでは、当研究会が新たな局面を迎えましたら、またここでご報告させて頂こうと思います。

(子どもの生活研究所)

嬉泉の出来事

第34回嬉泉バザー

今年の子どもの生活研究所のバザーは34回を迎え、大モデルチェンジ(?)を余儀なくされた。子どもの生活研究所が改築にかかり、例年の会場自体がなくなってしまうため、世田谷区役所中庭で開催することになったからである。今までバザーの運営については、子どもの生活研究所の一、二階の部屋と庭と階段をきめ細かく使い分けて、会場を作ってきた経験が積み重なって、いつしかマニュアル化されつつあったが、今回、ただただ広い会場を平面的なレベルで工夫していくという、発想の転換が求められることになったのである。同時に物の置き場の全くない仮園舎に日々集まってくる膨大な寄付物品を、どこかにしばらく保管して、バザー前日に一挙に会場に運び、『嬉泉バザー会場』とし

て創り上げていくという手順を、どう組み立てていくかという課題、物の仕分け、値段付けなどの細々した作業をどこでやるかという問題もあった。

三、三四四、四六四四という、予想をはるかに上回る収益を得てバザーを終えた今、振り返ると二つの大事な事を体験したと感じている。

一つは、私たちは大勢の人々の好意と善意に囲まれて、仕事をさせていだいていただいているのだということである。もともと私たちの仕事は、沢山の方々の力に支えられて発展してきたのだけれど、今年のように新しく解決しなければならぬ問題が沢山出てきた時、次々に助けて下さる方が現れ、困難な事態が解決していく時、私たちは本当に人の好意や善意に支えられているのだという、暖かさや力強さに包まれる思いがした。区役所の近くに住んでいらっしゃる二人

の後援会会員の方が、ご自宅の一部を貸して下さり、品物を保管したり手芸品の値段付けの作業ができた。トラックも前日と当日に三台貸して下さる方があり、アクアラインにも助けられて大活躍してくれた。バザー当日も、会場や駐車場でいろいろな問題が起きてきた時、世田谷区の関係者の方がすべて善意で解決して下さいました。もちろん、その他にも沢山のお力をいただいた。決して当たり前のことと思っではいけないと、強く思ったことである。

もう一つは、これも当たり前前の事だが、マニュアルがない時、人は自発的になるということである。「そうだ、こうしよう」という事が沢山あったように思う。ルーティーンの仕事が山積し、いつの間にかマニュアルに沿って、要領良く働く事を心掛けがちな日常に、自発的に動く必要に迫られることは大事なことであろう。昔「新しい事に多く出会える事は幸せな事だ」とおっしゃった、小林大作先生の言葉を思いださせてもらった。

最後に、嬉しかったのは、久しぶりに石井先生の陣頭指揮に接した事である。バザー終了後沢山の車両と人を動かして、少しでも早

く撤退作業を終了しなければならなかった時、総務の私に「隣で見ていると指揮を取り始められたのさばりか」とおっしゃって、てきぱきと指揮を取り始められたのである。さすがに見事だった。この頃何かと疲れやすい石井先生なので後が気になり、翌日「大丈夫ですか」と伺うと、ニヤッと笑って「僕はああいうことをやってた方が良いみたい、ちっとも疲れていない、元気、元気」と、本当に元気そうだった。「水を得た魚」とはこの事だろう。石井先生に「好きで得意なこと」をたくさんしてほしいものである。

(めばえ学園園長 奥村 幸子)



「障害者総合美術展」入選作品

第三回「障害者総合美術展」入選！

なっ、何と、赤塚福祉園ほほえみグループの陶芸作品「赤塚コンサート みんなかまえて」が、第三回「障害者総合美術展」(主催 日本チャリティ協会)に堂々入選しました！「すごい」「やったあ」「信じられない」「うそお」と歓声が飛び交い、思わず万歳三唱。入選の電話をもらった時には、受話器に向かって「ありがとうございしました」と、何度も頭を下げてしまいました。今回は五七四点の応募があり、審査の結果一七〇点が入選したとのこと。審査員も東京芸術大学名誉教授をはじめ、各界で有名な方ばかり、また入選した作品のレベルの高さもかなりのものだったので、本当に素晴らしい快挙だと思っています。

今回の出品に当たって、利用者や職員と話し合いをした結果、「赤塚エンジェルズ(バンド名)」で演奏している自分自身を、陶芸で表現しようということになりました。題名も利用者の方がつけてきました。エレクトーンを弾く腕の高さにまでこだわった方、「はい、

出来上がり」と、あっという間に作ってしまう方と、いろいろでしたが、皆自分の感性を大事にして自分なりに持てる力を最大限に発揮して作っていると感じました。きっと大好きな音楽活動ということで、分かりますかったということもあるでしょう。「あつ、これ〇〇さん」と誰が見ても分かり、今にも音が聞こえてきそうなほど、臨場感溢れる作品ができました。ずば抜けた才能がなくても(えっ、ありますって?)、一人一人が力を合わせ、その力を結集させた結果であり、皆の作品への思いがしっかりと伝わったのだと思います。ほのぼのとした暖かさとはほえましい雰囲気、作品から伝わってきたよかったという、お褒めの言葉をたくさんいただきました。個人受賞ももちろんすごいことですが、やはりグループとして受賞できたということは最高ですね。先日、皆で美術展に行き、お祝いにリッチな食事をして帰ってきました。本物の赤塚エンジェルズも、陶芸作品に負けないよう、初の地域でのクリスマスコンサートをはじめ、大山文化会館でのスプリングコンサートに向け、張りきって練習しています。これから

もがんばるぞ。

(赤塚福祉園 斉藤 敦子)

のびろ・ひかりの大運動会

去る十月二一日(水)、恒例の『のびろ・ひかりの大運動会』が行われました。

『秋祭り』『バザー』と行事が続き、短い準備期間でしたが、石井所長が提案する「日頃の生活、人とかかわりなどが見える競技」をコンセプトに、プログラムを考案、練習を行っていました。また、運動会当日は、保護者の方を始め、しいの木養護学校の先生方、ボランティアの方にも協力いただきました。後れ馳せながら、皆さんありがとうございました。

さて、プログラムの内容ですが、数々の障害物乗り越えたり、親子でダンスを踊ったり、二人三脚をしたり、自転車に乗ったり、理想の部屋を作ったり、応援合戦をしたり、日頃の作業を競技に取り入れたりと、どれも趣向を凝らした内容でした。

一方、利用者の方は、短い練習ながら難なく障害物をクリアする

る方、職員に励まされて頑張る方、保護者と楽しそうに競技する方：など、参加の仕方もバラエティーに富んでいました。

最後の競技は「グループ対抗リレー」で、利用者、保護者、職員の代表者が参加し、皆さんが一生懸命競技、応援して競技の最後を飾りました(リレーの優勝は、のびろが「あけぼの組」、ひかりのが「あゆみ組」でした)。

ただ、何しろ天候が悪く、風邪をひかないか、プログラムが最後までできるか、冷や冷やしましたが、一生懸命競技、応援している皆さんの姿に、天候の悪さもふっ飛んだ感じです。

地域の行事や祭りにも、年々続くその行事の「流れ」や「意味」というものがあると思います。いろいろな人の動き、アイデア、協力などで学園の運動会が運営されていて、競技の参加も利用者それぞれで、まさに『大運動会』の意味を知りました。

(袖ヶ浦ひかりの学園 一尾 弘志)



ひかりのタイムス

独立第34号

グループホーム入居 予定者の心境

グループホーム「春のひかり」
入居予定者四名に、抱負を語って
もらいました。

村岡さん

「自活経験棟で出来るようになったことは

「食事の準備とか食器洗いとか。」

「掃除とか洗濯は

「自信あります。」

「他の人と話ができますか

「ちょっと心配、一方的な人が多い。」

「GHで期待していることは

「うるさい人と接しなくてすむ。」

「GHでの希望は

「職員が遊びにきてほしい。」

「将来の希望は

「ゴミを集めたりの掃除の仕事がいい」

「結婚は考えていない。めんどくさい。友達つきあいはいい結婚はいや。」

山岸さん

「自信のもてることは

「食器あらいは大丈夫。掃除は職場でもやっているのだから、トイレ掃除は実際どうかなあ。アイロンは熱くて怖い。料理はなれてきたけど、献立は本とか見ないと。」

「楽しみにしていることは

「外出が自由になる。施設と街は遠い。図書館も近くなる。職場もカラオケ行ったりとか。」

「デートができるかもしれない。お酒を飲みに行ったりできるかも。」

「心配なことは

「お金の問題。施設の生活からの切替えができるかどうか心配。親なき後も心配。」

「あとは心配なことは

「仕事の話以外会話のネタが少なくとよくわかった。あれだけ雑談で悩んでいたのに、四年間で身に付かなかった。」

「コミュニケーションをとろうという気持ちはあるの

「あるよ。昔と違って変わったんだけど、みなさん理解してくれない。

い。昔のイメージでみているから、何しかずかわかんない。また嫌み言うだろうという目でみている。私もそういう言動してきたから、彼らが受け入れづらい状況をつくった。」

「将来的には

「やってみたいと分かんない。やってみていろいろ出てくるんだから。」

「夢は。一人暮らしとかしたいと思わない

「一人暮らしは寂しいからできないと思う。性格的に。他人に気はつかわなきゃいけないけど。」

田中さん

「出来るようになったことは

「料理、掃除、洗濯。完璧にできます。料理は忙しいからそんなにできませんが。」

「できないことは

「そんなに浮かばないですね。車の運転ぐらいですが、あまり関係ないですかね。」

「楽しみにしていることは

「施設園生は怒るとか、話し出すと止まらないとか、話しかけても答えないとか、そういう嫌な友達に会わないのが楽しみだなと思います。」

「職場も近くなるのもいいのかなと思います。生活のシステムも変えられる。」

「心配なこと

「生活費がかかることが心配ですね。」

「夢は

「東京都内で働きたいと思っていましたね。今も思うこともあるけれど、現実的には千葉県内しかないの。あと一人住まいをしたい。」

飯田さん

「出来るようになったことは

「初めてのことで自分の判断でうまくできるようになったことです。」

「難しいことは

「強いていえば料理のレパートリーが少ないことかな。」

「楽しみは

「普通の人に近い生活ができるということ。買い物も毎日楽しみながらできることとか、プールやカラオケもすぐ行けることです。駅も近くコンビニもあり、便利になることです。」

「心配なことは

「通勤が心配です。あと雷が心配。職場から帰る時雷が鳴ったらどうしようと思う。」

「夢は

「難しいですね、グループホームで暮らしてみても自分はどう変わるか、それによって変わってくると思うんです。」